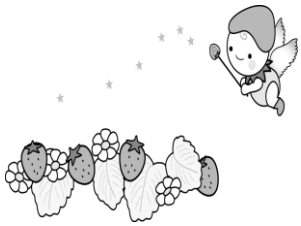
養護教員部ＮＥＷＳ

埼教組養護教員部　2024 年３月１９日
埼玉県教職員組合 ☎048-824-2511

教育のつどい　埼玉県集会より



2023 年度の教育のつどいは、11 月 12 日深谷商業高等学校で開催されました。全教養護教員部全国委員会と同日開催だったため、健康分科会の参加人数は多くありませんでしたが、小学校から中学、高校までの仲間と顔を合わせて本音で話せる貴重な時間でした。

レポートは小学校から１本（チームで取り組む保健指導～生活リズムを整える指導の実践報告～）、中学校から１本（保健室での対応～子どもの心の安全基地になれていたかを考える～）でした。

小学校のレポートは、令和 3 年に市内で行われた「生活習慣アンケート」で生活リズムが乱れていると思われる児童が想像以上に多かったことから校内での取り組みが始まり、市内の養護部会にまで広がった報告です。小さなことの積み重ねや、周囲の人とのコミュニケーションから生まれる信頼関係が大きなうねりとなっていく様子が語られました。

中学校では新天地で初対面の生徒たちとのやりとりに苦戦した様子が報告されました。決して生徒の心情や体調をないがしろにしたわけではなく、生徒のことを思ってかけた言葉が逆効果となり保護者から苦言をいただいたことも報告されました。「安全基地の機能を果たせる保健室（養護教諭）のもとで、エネルギーをためていって、自ら次の行動に動き出すまで待つ」「その子の気持ちにしっかり寄り添い、その子自らの言動を丸ごと受け止める」「担任・相談室・SC 等と協力し、保健室の役割を果たす」等、保健室での対応の在り方を議論しました。

高校からは「タバコ販売促進会」から『20 歳未満喫煙防止キャンペーン参加協力のお願い』という文章が学校にきて生徒が 15 名程度朝からテッシュ配りをすることになった経緯について情報提供がありました。学校長から参加を促される形で、自主的なものではなく、「タバコ販売促進会」に協力することになるため注意が必要とのことでした。

全教養護教員部 関東ブロック学習会の報告

「奇跡のきょうしつ１２年の歩み
～１対１から生まれる希望へ～」

講師：白鳥　勲さん（社団法人彩の国子ども若者支援ネットワーク代表理事）

１２月９日（土）にさいたま市文化センターで開催された第３１回関東ブロック学習会には、埼教組から７名が参加しました。広く参加を呼びかけたことから、一般教員や養護実習生の参加もありました。

講師の白鳥さんは、２０１０年「アスポート」の設立時から活動されていて、行政とともに実績をあげてきました。アスポート事業は今では埼玉県の子ども支援の中核となっています。現在では、小・中・高の子どもたちが通い、近年ではスクールソーシャルワーカーや特別支援コーディネーター、学校と連携し、子どもたちの困難を支える組織が出来つつある地域もあるそうです。

教育困難校で出会った高校生との出会いが出発点・・・

白鳥さんは現役時代、200 人ほどの生徒が入学してくるが、卒業できるのはそのうちの約半数という高校に１５年間勤務し、退学した高校生の大半は家庭に困難を抱えているという実態を見てきたそうです。自己責任の名の下、貧困層が増え、連鎖しているのが日本の実情です。親からのサポートがない、また子が家族を支えるような困難な状況も珍しくありません。困難な状況の家庭の保護者や子どもは、他の人に頼ってはいけないという意識が強く、家庭訪問をしてもなかなかドアを開けてくれないことも多いそうです。

１対１の関わりで子どもがかわる

引きこもりがちの子が、説得と納得を武器にした家庭訪問時の声かけや置き手紙の積み重ねで、少しずつ顔を見せてくれるようになった。他人事のように思っていた「高校受験」を目指し、「アスポート」での１対１の学習支援で学びの楽しさを体験し、仲間や生き方のモデルとなるような年長者との関わりから、未来への一歩を踏み出す力が引き出されていったという実践報告は感動的でした。

学校に行ける自信は、「身だしなみが整えられる」、「連絡帳や宿題を見てもらえる」、「空腹が満たされる」、「いってらっしゃいと言われる安心感」がないと失われてしまう。第三者の関わりは、暗いトンネルの中での光になる。「アスポート」に通うスケジュールがあることで、生活をコントロールするようになる。白鳥先生の実践から生まれた数々の具体的なお話に、明るい未来の光を感じることができました。

参加者の感想より

- 不登校が長くなると、社会に出ることもペンを持つことも、自分と向き合うことができないとスタートできないと思います。自分をあきらめている子どもたちに、その勇気を起こさせる熱心さ、それを組織化して行政を動かして…もうすごすぎると思いました。何気ない言葉が「地下水脈」となって子供に流れている…。明日も頑張れます。また、子どもと家庭を知ると「第一声が変わる！」本当にそうだと思います。職員にうまく伝えたいと思います。
- 白鳥先生のお話は何度かうかがっていますが、その時々に自分の頭の中に思い浮かぶ生徒が違うせいか、今回も改めて心に残るポイントがたくさんありました。学校に行く自信「身だしなみ、宿題，食事，行ってらっしゃい」がない子どもたちが保健室に来ます。安心して過ごしてよい保健室と 1 対 1 でかかわることのできる養護教諭として、やるべきことを改めて考えました。
  「給食を食べにおいで」「行事があるからおいで」と先生たちも不登校の生徒たちに声をかけています。実際，普段，全く教室に行っていないのに宿泊学習だけ参加した生徒もいます。働き方改革で行事の見直しもされていますが、子どもたちが楽しみにしている行事を安易に無くさないよう検討したいと思いました。

2023 年度養護教員部委員会の報告

2024 年２月 23 日（金）養護教員部委員会を開催しました。

今回は、現地参加６名とオンライン参加３名、合わせて９名の養護教諭で議案書の総括をした後、職場での働き方や子どもたちの様子などを交流しました。簡単ですが、内容を紹介します。

中学校での不登校対策ルームについて

現在、不登校対策として各市の中学校でステップアップ教室が設置され、運用が始まっています。その状況についての報告がありました。「学習をするための部屋ということで部屋を設置したが、専任の担当者がいないため、子どもが一人になってしまうことがある」「授業が空きの教員がそこに行って担当しているため、現場の負担が大きい。」「今まで教員が空き時間に行っていたが、行事等があるとその部屋に教員が行けない時間があるなどなかなかうまく運用できなかった。現在は教員でない人が時給で入っている。細かな問題はあるものの、人が入ってくれたことによりその部屋をずっとうまく運用できている。」「飯能市では、年度途中、不登校生徒が多い中学校にステップアップ教室が設置され、そこに市で採用された人が２人配置された。」「川口市内中学校のスッテップアップ教室の中には、養護教諭が主任を任されていて、負担が大きいという声が届いている。」など、様々な現状が語られました。

小学校の不登校対応は・・・

中学校の不登校生徒の問題同様、小学校の不登校児童の問題も深刻です。市の相談員をしている元養護教員からは、「小学生の不登校が増えているが、小学校の相談室には相談員が居ないために学校に行けない児童が多くいる。現在、文科省『COCOLO プラン』が出ていて、小学校にも相談室や相談員を配置するという方針はでているが、予算の問題があり市町村で対応に差がある。」という報告がありました。他にも退職して地域で活躍している元養護教諭からは、「地域で不登校の子の居場所を作ろうとする活動している。その際、足立区が先進的な取り組みをしているため、参考になる。また、戸田市は通級指導教室の取り組みがうまく機能している。」との報告がありました。

小中一貫校ってどうなの？

さいたま市では、武蔵浦和地区に 3700 人の超大規模な小中一貫校の計画が進んでいるそうです。また、県内では他市でも小中一貫校が作られていますが、問題もあるということが語られました。「飯能市の小中一貫校では、カリキュラムなど様々な問題があり、現場は混乱している。」また、「現在、県内で進められている小中一貫校の設置は、例えば小中合わせて３校を１校にする場合、３ 人いた養護教諭が １ 人になってしまうなど、人件費を減らすことができるため、経費削減という側面もある。」という発言もありました。また、「子どもの人数が減ってくるのであれば、教室の数や教員の人数を減らすのではなく、１クラスの人数を減らして少人数学級にすることで教員の負担が減るだけではなく、一人一人の子どもに目が届くようになるので、不登校の子どもを減らすことにもつながるのではないか。」といった意見もありました。埼玉県教育委員会は、小中一貫教育のメリットの一つとして、「いわゆる中一ギャップの解消」などを挙げていますが、「地域の子どもたちにとって通いやすい学校とはどのような学校なのか」といったことを考えていく必要があると思います。

さいたま市のスクールダッシュボードの取り組みとは？

さいたま市の養護教諭から、さいたま市で「スクールダッシュボード」の取り組みが開始されることになり、試行が２月上旬から始まったことの報告がありました。「朝の健康観察を生徒が自分で入力する。その際、朝食を食べたか、心の状態はどうかなどの項目もあるため時間がかかり、一斉に入力するための時間を設けることになった。また、心の状態が良くない生徒に対しては、教員が声をかけて様子を確認する必要があるが、項目が多く、確認作業が大変である。」など、現場が負担に感じている実態がわかりました。それに対し「健康観察をデジタル化するという動きがあるが、養護教諭としては、『元気ですか』『はい、元気です』という、担任が顔を見て声を聞いて健康状態を確認するということが大切だと思う」「全て情報化されて管理されることに危機感を覚える。」などといった声がありました。

ほかにも・・

複数の中学校の養護教諭から、「今年度の中学生は今まで以上に入試直前に休む生徒が多かった。中には入試の数週間前から休む生徒もいた。」と、感染対策に敏感になっている様子が語られました。また、デジタル化については、健康観察だけではなく、健康診断結果をデジタル化してマイナポータル等と連携させるといったことなどが進められていることなど、様々な情報の管理をすることで起こる情報漏洩等の心配や、それら個人情報が膨大にデータ管理されることに危機感を感じるなどといった声がありました。退職した元養護教諭からは、「現場は本当に大変だと思う。現在学校現場にいて、若い教員との会話が深められないと感じることがあったり、教育現場の変化が大きくて対応に悩むことがあったりする。皆さんには本当に頑張ってもらいたいと思います。」という激励がありました。

夏の全国学習交流集会に向けて

来年度は、いよいよ埼玉で「夏の全国学習交流集会」があります。参加者からは、「今度の夏学の基調講演の講師からは、教育の原点とは何かといったことを学ぶことができると思う。また、分科会では自分が思っていることを自由に発信することを体験することができる。このようなことを多くの人に体験してもらい、組合を知ってもらいたい。組合だから直接県教委に意見を訴えることができるし、こうして横のつながりを持つことができる。ぜひ、未組の人を夏学に誘って来てもらいましょう。」と力強く語られました。

＜当面のとりくみ＞

1　子どもの健康・生活実態を把握し、憲法に基づいた教育実践を保護者・教職員とともにすすめます。
2　集団フッ化物洗口など、学校現場の理解なしに強制的に導入しようとする動きに反対します。
3　養護教諭の仲間との対話を大切にし、悩みや要求を共有することから運動をすすめます。
4　養護教員部の活動を発信するとともに加入を呼びかけ、仲間を増やします。
5　2024 年に埼玉で開催する夏の全国学習交流集会の成功に向け、実行委員会体制で準備をすすめます。